

## 東京音楽大学附属民族音楽研究所刊行物リポジトリ

Title	東京音楽大学附属民族音楽研究所主催 2023 年度公開講座 No.4 「中世からルネサンス時代のスペイン音楽～歌とビウエラとリュートで探索してみよう！～」
Title in another language	FY2023 IETCM Public Lecture Series #4 – Spanish Music from the Middle Era to the Renaissance Era: ~Let's explore with song, vihuela and lute!~
Author(s)	水戸茂雄 (MITO Shigeo), 坂崎則子 (SAKAZAKI Noriko), 服部洋一 (HATTORI Yoichi)
Citation	伝統と創造=Dento to Sozo, Vol. 14, p. 49-64
Date of issue	2025-03-26
ISSN & ISSN-L	Print edition: ISSN 2189-2350, Online edition: ISSN 2189-2482, ISSN-L 2189-2350
URL	<a href="https://tcm-minken.jp/publication/IE_B14202405.pdf">https://tcm-minken.jp/publication/IE_B14202405.pdf</a>

東京音楽大学附属民族音楽研究所主催 2023 年度公開講座 No.4  
「中世からルネサンス時代のスペイン音楽  
～歌とビウエラとリュートで探索してみよう！～」

FY2023 IETCM Public Lecture Series #4 – Spanish Music from the Middle Era to the Renaissance Era: ~Let's explore with song, vihuela and lute!~

水戸茂雄 MITO Shigeo\*1  
坂崎則子 SAKAZAKI Noriko\*2  
服部洋一 HATTORI Yoichi\*3

13 世紀から 16 世紀までのスペインではどのようなジャンルの音楽が奏でられていたのか、歌（ソプラノ、アルト、テノール、バリトン）とビウエラとリュートで解説と実演を行った。

キーワード：ルネサンス・リュート Renaissance lute、ビウエラ Vihuela、  
聖母マリアのカンティーガス集 アルフォンソ賢王編纂  
Cantigas de Santa Maria del Rey Alfonso del Sabio、  
モンセラートの朱い本 Libre Vermell de Monserrat、  
王宮の歌曲集 Cancionero Musica de Palacio、  
ビウエラ音楽 Musica para Vihuela、  
ビウエラ歌曲 El Canto de las Vihuelas、  
ウプサラの歌曲集 Cancionero de Upsala、

## 講座概要

水戸茂雄

### 1. はじめに

今回の公開講座では、日本の音楽教育においてほぼ触れられる機会がない、13 世紀から 16 世紀にかけてのスペイン音楽を整理分類し、それらの楽曲についての解説と実演を通して、受講者にスペイン音楽を知ってもらおう企画をたてた。当時の宗教音楽、世俗の娯楽音楽から選曲し、特にこの時代のスペインで最も重要な楽器であるビウエラ音楽にも焦点を当てた。具体的には、音楽史的に重要な資料と思われる書籍から単旋律、カノン、3 声～4 声のポリフォニー音楽を選曲した。調査した資料を次に列挙する。

宗教音楽では賢王アルフォンソ 10 世編纂による聖母サンタマリアのカンティーガス集 Cantigas de Santa María del Rey Alfonso el Sabio(13c)

モンセラートの紅い本 Libre Vermell de Monserrat(14c)

『王宮の歌曲集』 Cancionero Musica de Palacio (15c-16c)

カノンではモンセラートの紅い本 Libre Vermell de Monserrat(14c)

娯楽音楽では『王宮の歌曲集』 Cancionero Musica de Palacio (15c-16c)

ビウエラ音楽ではアロンソ・ムダラー Alonso Mudarra(1510?1580)

3 声～4 声のポリフォニー音楽では『王宮の歌曲集』 Cancionero Musica de Palacio

(15c-16c)

4声の合唱とビウエラ歌曲ではウプサラの歌曲集 *Cancionero de Upsala*(1556) とミゲル・デ・フエンジャーナ *Miguel de Fuenllana* を使用した。

これらの資料には膨大な数の楽曲が含まれており、限られた時間の中で全てを見て選別することは不可能であるため、初めにおよそ300曲位に見当を付けて、そこから企画に相応しいと思われる楽曲を50曲位に絞り、最終的には18曲を分類別に配置した。また、この時代の楽譜にはテンポに関する記載がないので、演奏に当たって筆者がこれらの曲想に合うテンポを設定した。開講に向けて2022年度公開講座 No.2 「ルネサンス時代のリュートとビウエラ ～歌との関係は?～」のメンバーに出演を依頼した。スペイン語の古語や様々な言語が入り混じった超難解な歌詞の日本語対訳は服部洋一声楽部会教授が快諾され立派な対訳をして頂いた。訳詞は本校図書館のリポジトリに掲載されている。今回の講座では坂崎則子音楽学教授が退官されるので、音楽学の最後の講義を含めての公開講座となった。坂崎則子音楽学教授が講義を進める中で服部洋一声楽部会教授と水戸茂雄講師がそれぞれ質問に答え、演奏をしていく形をとった。

## 2. プログラム

TCM 東京音楽大学附属民族音楽研究所主催 2023年度公開講座 No.4

中世からルネサンス時代のスペイン音楽

～歌とビウエラとリュートで探索してみよう～

「坂崎則子音楽学教授最後の講義を含む」

お話と司会進行：坂崎則子（本学音楽学教授）、

お話とビウエラとリュート：水戸茂雄（本学リュート講師）、

お話と合唱指導と対訳：服部洋一（本学声楽部会教授）

合唱：ソプラノ：若林ゆみ、アルト：神原愛、テノール：原佑斗、バリトン：長谷川陽向（本学声楽学生、卒業生）

### プログラム第1部 宗教音楽

ここでは100年ごとの3つの時代で音楽がどの様に変遷していったかを、比較検証した。

*Cantigas de Santa María del Rey Alfonso el Sabio*(13c) より

聖母マリアのカンティーガス

アルフォンソ賢王(13世紀) 編纂による

カンティーガスは色々な分野の曲を集めたもの。今回取り上げる曲は「信仰のカンティーガ」で、13世紀カスティーリャ-レオン王国のアルフォンソ賢王が聖母マリアを讃えるカンティーガを集成したものである。420編から成り、ガリシア-ポルトガル語の歌詞で書かれている。資料は本学付属図書館にある *La Música de las CANTIGAS DE SANTA MARIA DEL REY ALFONSO EL SABIO, Facsimil del Códice j.b.2 de el ESCORIAL 1964* 年

版の資料から選曲した。資料はアンカット本（紙を4つ折りで製本しており、上部が裁断されていない状態）で未開封の状態であったので、上部をペーパーナイフでカットしながら見た。古い本なので細心の注意を要した。

1. Como Santa María 聖母マリーアは善をなす道を我らに示し

単旋律で書かれた楽曲で、和声付けした旋律をリュートで弾き、続いてリュートを伴ってテノールが旋律を歌う。

2. Santa María amar 聖母マリーアを愛し、祈るべし

これも単旋律で書かれた楽曲で、分散和音をリュートで弾き、バリトンが旋律を歌う。

Libre Vermell de Monserrat(14c)

『モンセラートの朱い本』より

モンセラートの朱い本はスペインのバルセローナにある岩山に作られたモンセラート修道院に収められている、12 - 13 世紀に編纂された説教書で、その中に9曲納められている。この説教書は1808年にナポレオン軍のスペイン侵攻でモンセラートが襲撃される前に、バルセロナのリオー侯爵に貸し出されていて難を逃れたので、奇蹟の本と呼ばれている。「モンセラートの朱い本」の由来は返却後、朱色のビロードで装丁されたため。納められた曲は、巡礼者たちが輪になって踊るために歌わなければならないとある。この修道院には4人の天正遣欧少年使節が1585年ローマでローマ教皇グレゴリウス13世に謁見後、また1615年慶長遣欧使節団の正使として伊達藩の支倉常長がローマ教皇パウルス5世に謁見した時に、それぞれモンセラート修道院を訪れている。彼らはどのような思いでこの地を踏んだのか。嘗て長年スペインにいてバルセロナにも何度も行った事があるが、ここを訪れる機会がなかった筆者も、今回、この公開講座を行うにあたって巡礼者たちが輪になって踊る情景を実際に肌で感じなければ講座が出来ないとの思いから、1月にモンセラート修道院を訪れて「黒のマリア像」にも会い、広場にも立って、曲のインスピレーションを得た。

3. Stella Splendens 輝く星よ

4. Cunctisimus 声を揃えて歌おうではないか

初めにビウエラで1フレーズ旋律を奏で、その後4声と1声が交互に歌う設定にした。その事により受講者が巡礼者達の輪となり、男女一人ひとりが喜びを分かち合う様子を髣髴とさせるようにした。

Cancionero Musica de Palacio (15c-16c)

『王宮の歌曲集』(15～16世紀)より

5. Dios te salve cruz Anonimo 神の御救いがありますように かけがえのない十字架よ  
作者不詳

6. Ave Virgo Anonimo 聖処女に幸あれ 喜びに満ちてあれ 作者不詳

7. Ay Santa María Anonimo ああ、聖なるマリアよ 作者不詳

カトリック両王アラゴン王フェルナンド2世とカスティーリャ女王イサベル1世の時代に宮廷で演奏されていた曲集で主にカスティーリャ語、現在の標準スペイン語で書かれており、全部で460曲余りある。これらの曲は3声部～4声部のビジャンシーコ形式で作曲されている。テーマAと対照部BがABBAと進行する形式のこと。聖母マリアのカンティーガスやモンセラートの朱い本と比べて和音も3度音程、6度音程が加わりより豊かな響きになる。

### プログラム第1部 カノン（輪唱）

Libre Vermell de Monserrat(14c)

『モンセラートの朱い本』より

8. Canon 1声、2声、3声、4声

M8. Canon à 2 ou 3 voix 2声或いは3声のカノン

I,II,III声 Laudemus Virginem 聖処女を褒め称えよう

II声 Splendens ceptigera 光放つ聖処女よ

IV声 Laudemus Virginem と Splendens ceptigera を合わせて

カノン形式は日本語で輪唱と言われる形式で、ある一つのテーマを複数の人達が追いかけて歌って行くことによって木霊のように響く。ここでは最初にLaudemus Virginemを1声から2声、3声と徐々に声を重ねて行き、もう一つのテーマSplendens ceptigeraを重ねて合わせて4声で歌ってみることにによって、どのような響きの効果があるか受講者に体感してもらおう。

### プログラム第1部 娯楽音楽、言葉のサラダ（言葉遊び）

Cancionero Musica de Palacio (15c-16c)

『王宮の歌曲集』（15～16世紀）より

9. El Cervel mi fa Nacte i die Anonimo 夜となく昼となく、また夕べとなく 作者不詳

10. La Tricotea Samartin la vea Alonso ラ・トリコテーア(三角形のそのナニを)アロンソ

11. Dindirin dindirin Anonimo ディンディリン・ディンディリン 作者不詳

宮廷と言うと堅苦しいイメージがあるが、ここではこの歌曲集の中の娯楽音楽を紹介する。酔っぱらいの歌、ちょっと猥雑な歌、さらに1曲の中に何種類もの言語が詰め込められている歌など、多様な世俗音楽も収められている。これらの音楽を聴きながら飲んだり食べたり、当時の宮廷のサロンも大いに盛り上がった様子を想像しながら受講者にも楽しんで盛り上がってもらおう。

### プログラム第2部 Vihuela ソロ

12. Conde Claros 12のディフェレンシ阿斯 Alonso Mudarra (1510?1580)

クラロス伯爵 アロンソ・ムダーラ

15世紀のスペインの宮廷や教会ではビウエラと言う撥弦楽器が音楽の最先端に君臨していた。ギター型やヴィオラ型など絵画、彫刻などで今に伝わっている。15世紀の100余年間、隆盛を極めたが忽然と歴史から消え去った楽器。現存するビウエラは僅か数本のみ。楽曲も現存するものは7人のビウエラ作曲家の残した曲集と1巻の曲集と僅かだが、当時としては比類ない画期的な音楽形式を多々残している。楽曲の冒頭にテンポの指示や演奏表現、演奏技法、旋法などの提示があり、このことは他のヨーロッパの諸国では見られない。この「クラロス伯」の「12のディフェレンシアス」のディフェレンシアスとは変奏のことで、この形式はテーマから始まるのではなく、いきなり第1変奏から始まる。そして第1変奏で弾かれたバスパートが、11回上声部や中声部に置かれて色々な形で華麗に変奏されていく。拍節はイチニイ、イチニイ、イチニイ、イチニイサン、イチニイサンと言うリズムで変奏される。

## プログラム第2部 ポリフォニー音楽

Cancionero Musica de Palacio (15c-16c)

『王宮の歌曲集』(15～16世紀)より

13. Revelóse mi cuidado Jo del Ensina (1468-1529) 色に出にけりわが思い フアン・デル・エンシーナ

14. No soy quién la descubre Gabriel 痛みを知ったのは私ではなくて ガブリエル

15. Tan buen ganadico Jo del Ensina (1468-1529) 何て可愛いうちの羊 フアン・デル・エンシーナ

ここでは3声のポリフォニー音楽2曲と4声の5拍子のリズムの曲を体験してもらう。Revelóse mi cuidadoは3/2拍子で書かれおり、初め3度、5度、8度音程で全音符と2分音符が進行し、中間部では3声が4分音符による上行パッセージで絡み合っ曲を引き締めている。

No soy quién la descubreは4/4拍子で書かれており、前半部ではいきなり8分音符の速いパッセージで歌が始まり、各声部が上行下行で絡み合っ進行する。後半部は各声部が絡み合いながらも穏やかに進行し、D.C.で再び前半部に戻り、各声部が上行下行で絡み合っ終止する。

Tan buen ganadicoは5/8拍子で書かれており、この曲では①23④5と1拍目と4拍目にアクセントが付き進行して行く。プログラム12.のクラロス伯の12のディフェレンシアスでも述べた通り、リズムが3拍子と2拍子、2拍子と3拍子が組み合わせるため、曲に躍動感が生まれる。

## プログラム第2部 4声の合唱とビウエラ歌曲

El Canto de las Vihuelas と Cancionero de Upsala(1556)

ビウエラ歌曲とウプサラの歌曲集(1556年)より

16. ¿Conqué la lavaré? Miguél de Fuenllana(1500-1579)-Juan Vazquez(1500-1560) 服部洋一 編

何を使って洗いましょう? フアン・バスケス — ミゲル・デ・フエンジャーナ

17. Teresica hermana-llama a Teresica Mateo Flecha(1481-1553) 服部洋一 編  
テレシーカ姉ちゃん〜テレシーカを呼んだとて 老マテオ・フレチャ

¿Conqué la lavaré? はスペインの古謡。この美しい旋律はビウエラ音楽であったり、4声の合唱の形で歌い継がれている。ビウエラではタブラチュア譜と言う演奏譜の楽譜が使用されており、6本の並行する線上に記されたアラビア数字とローマ数字によって音が示されている。歌のパートは赤い数字で示され、ビウエラのパートは黒い数字で示される。ビウエラ歌曲として演奏する時は赤い数字を歌手が、黒い数字をビウエラが演奏する。また、ビウエラの独奏であれば全ての数字をビウエラで演奏する。一方、バスケスはソプラノ、アルト、テノール、バスの4声のポリフォニーのスタイルで作曲している。また現代では、スペインの作曲家ホアキン・ロドリゴ(1901-1999)が「4つの愛のマドリガル」の冒頭の曲として扱っている。はじめにビウエラ・ソロで、続けて4声の合唱で演奏し、聴講者にこの曲の雰囲気の違いを感じてもらう。

Teresica hermana-llama a Teresica はウプサラの歌曲集からのものである。この曲集はスウェーデンのウプサラ大学の古文書から発見された曲集で、曲集の前後数ページが欠落した状態であるが、2声の曲が6曲、3声、4声、5声のものがそれぞれ12曲が整理された形で残っている。この曲はフェンジャーナのビウエラ歌曲の中にも残されている。今回は老マテオ・フレチャの曲をビウエラも交えて、2拍子の「テレシーカ姉ちゃん」と3拍子の「テレシーカを呼んだとて」の曲を続けて演奏した。歌詞の内容はかなりきわどい話の展開になっている。

プログラム第2部 娯楽音楽

Cancionero Musica de Palacio (15c-16c)

『王宮の歌曲集』(15～16世紀)より

18. Oy comamos y bebamos Jo del Ensina (1468-1529)

今日のところは食ったり飲んだり ファン・デル・エンシーナ

講座の最後は再び娯楽音楽に戻り、演奏者と聴講者が一つになって飲んだり食べたり踊ったりの気分になることで締めくくられた。

\*\*\*\*\*

20世紀の作曲家にインスピレーションを与えた  
スペイン・ルネサンスの世俗歌曲たち

服部洋一

序

2022年度に引き続き、東京音楽大学附属民族音楽研究所主催による2023年度公開講座No.4『中世からルネサンス時代のスペイン音楽』に、今回も歌唱・発音指導者として関わらせていただいた。

プログラムは、中世の写本からは、『聖母マリアのカンティージャス集 *Cantigas de Santa Mría*』(成立の開始は、アルフォンソ賢王の即位中 1221 年～1284 年の間と伝えられる)、『モンセラートの朱い本 *Llibre vermell de Montserrat*』(13 世紀～14 世紀頃、モンセラート修道院へ参ずる巡礼者たちによって歌い踊られた 10 曲の歌謡を含む)より、またルネサンス時代からは、『王宮の歌曲集 *Cancionero musicaru del palacio*(以下 CMP と略)』(カトリック両王、即ち、イサベル 1 世とフェルナンド 2 世の即位期である 15 世紀末～16 世紀初頭に王宮を中心に演奏されていた多声音楽集)、ウプサラの歌曲集』(1556 年ヴェネツィアにて印刷され、発見当時より一部が欠損していたため、殆どが作者不詳とされる、カスティージャ語やカタルーニャ語をテキストとする多声音楽を記載した歌曲集)という 2 つの歌曲集を取上げた。これらをア・カペラによるヴォーカル・アンサンブルによる歌や、ビウエラ、ルネサンス・リュートの伴奏をともなう独唱やアンサンブルで演奏をおこなった。解説と司会は、坂崎則子先生、上記の弦楽器独奏及び伴奏は、水戸茂雄先生が務められ、声楽アンサンブルは 2022 年度と同じメンバー (Sop. 若林ゆみ、Alt. 神原愛、Ten. 原佑斗、Br. 長谷川陽向) で構成、筆者は、このプログラム曲のテキスト (ラテン語、古ガリシア語、古カタルーニャ語、カスティージャ語) の発音と歌唱法指導、そして当日のヴォーカル・アンサンブルの指揮を担当した。またステージ上では、水戸茂雄先生も解説を行ない、筆者もスペイン・ルネサンスの世俗歌曲集についての解説を担当した。

当日歌われた楽曲の歌詞対訳については、別途、本校図書館のリポジトリに掲載されている通りだが、今回、民族音楽研究所「研究紀要」に寄稿するにあたり、表題のように、スペイン・ルネサンスの世俗声楽曲 (或いはそのテキスト) が、20 世紀のスペインや他国の作曲家たちによって創作の題材として採られ、また彼らにどのようにインスピレーションを与えたかについて取上げてみたいと思い記述してみた。その意図は、このレクチャー・コンサートにおいて、古楽器の伴奏での独唱、重唱 (声楽アンサンブル) を経験した、本学に学ぶ声楽専攻の学生諸君や、会場で当コンサートをお聞きになられ方々も含めて、古き時代のスペイン音楽に興味・関心を持たれた方々が、実はこうしたルネサンスの世俗歌曲・合唱作品のテキストや旋律を現代においても、ピアノ伴奏、或いはギター伴奏でも演奏が可能であることを知っていただきたいこと、また、こうした古謡が、いかに 20 世紀を中心とするヨーロッパの作曲家たちに作品創作へと繋がっているかについて、その一部をご紹介したいと考えたからである。今回の演奏会で、時代様式にごく近い形で、歌ったもの、或いは聴いたものを、近現代のコーラージュ作品として、或いは創作作品として実際に演奏してみたいとなったり、ピアノ伴奏或いはギター伴奏で演奏してみたいとなったとき、その選曲の参考にもしていただけるかもしれないとの思いもある。(以下の記述においては、敢えて作曲家の生没年順については特にこだわっていないので、ご了承ください。)

#### ■ホアキン・ロドリーゴによる『4 つの愛のマドリガル』

近現代の作曲家が、スペイン古謡の旋律やテキストに触発されて創作した作品は、じつは意外と多い。その代表作と言えるもののひとつが、ホアキン・ロドリーゴ Joaquín

Rodrigo (1901-1999) の『4つの愛のマドリガル Cuatro madrigals amorosos』(1947)であろう。また彼には、今回のプログラムで扱った作品の一部とも同時代(15世紀末以降の)として関係のある『4つのセファルディーの歌』(1963)もあり、それ以前の、プレ・ルネサンス期の詩人のテキストによる作品—例えば、サンティリャーナ侯爵 Marquessa de Santillana(1398-1458)の詩に作曲した「フィノジョーサの牛飼娘」<Serranilla>—などもある。

『4つの愛のマドリガル』は、I. 何を使って洗いましょう?(¿Con qué la lavaré?), II. お前はわたしを殺めてくれた (Vos me matasteis), III. どこからおいでになったの 恋するお方?(¿De dónde venís, amore?), IV. 母さん、僕はポプラの林から来たんだ (De los álamos vengo, madre) の4曲から構成される。それらの旋律は、スペインの古謡として伝わるものを踏まえつつ、ロドリゴはコラージュに際しオリジナルの旋律に彼独自の变容も加えている。そして第1曲目の¿Con qué la lavaré?は、もの悲しい旋律と歌詞の内容が当時、ルネサンス時代の人々の心を打ったのだろう、大変流行した歌とみえて、この古謡をもとにビウエラの作曲家ミゲル・デ・フエンジャーナ Miguel de Fuenllana(1500-1579)もビウエラ歌曲(独唱とビウエラ伴奏による)に、またフアン・バスケス Juan Vazquez(1500-1560)が4声の多声声楽曲として編曲もし、また今回のプログラムでは割愛したのだが、更に『ウプサラの歌曲集』においてもバスケスのものよりも更に徹底したポリフォニックな手法で4声の多声声楽曲に編曲もされている。(前述のように残念ながらこの作詞は現在も尚不詳のままである。)

前者の2曲は今回の演奏会でも取上げられたが、ロドリゴの『4つの愛のマドリガル』中のこのピアノ伴奏付き歌曲では、詩節の最後のフレーズを旋律に持つ短い前奏から始まる。バスケスの曲及び『ウプサラの歌曲集』の同曲は、原詩のビジャンシーコ形式(\*1)に則って ABBA の形で作られていたが、ロドリゴは、歌詞内容の展開と文脈を重視して取上げている。また、間奏におけるピアノリズムは、至って独創的なもので、しかしスペイン・ルネサンスの宮廷趣味を意識した格調高く、また啜り泣くような装飾音を伴う、もの悲しい趣を表出している。

※1 ビジャンシーコ形式またはビジャンシーコ詩型とは、「決まり文句」とも言えるモテ *mote* を持ち、これが後続の詩節(エストローファ *estrofa*)の最後にその一部が現れて、詩の冒頭を再び想起させるという形となり、ABBA形式を持つ詩型となっている。この詩につけられた楽曲も、これに沿いつつ<ABBA BBA BBA...>と進んでいく形をとる。ちなみに現代では、ビジャンシーコというと、ほぼクリスマス・ソングの意味に変化してしまっているので、立て分けて捉えなければならない。

ロドリゴの『4つの愛のマドリガル』の後続の3曲も、すべてルネサンス時代の作品に題材を取ったものであるが、II. ~ IV. の3曲とも、上述のフアン・バスケスの作品集におさめられており、また一方でビウエラの作曲家もそれらの旋律を持つビウエラ歌曲作品を遺している。こればかりではない。この点から見ると、ロドリゴは、この『4つの愛のマドリガル』を構成する曲を選ぶに当たって、古来の旋律が、既にルネサンス期においても、こうした複数の編曲の対象となっていたことも評価しつつ、入念に選んだものと思われる。ちなみに、ロドリゴは、ルネサンス期の世俗歌曲に基づく、別の歌曲集『愛と戦いの歌』(ピセンテ・アセンシオの歌とピアノ・リダクションによる)として<モーロ

人の王は散策していた *Paseábase el rey moro* >をはじめとする全5曲の作品集も遺している。こちらは後にオーケスト伴奏に編曲されている。古の旋律とテキストからインスピレーションを受けて作曲されたものである。

## ■フェルナンド・オブラドルスによる『スペイン古典歌曲集』より

カタルーニャ出身のファラン・ウブラドース（カスティージャ語読み的には、フェルナンド・オブラドルス）Ferran Jaumandreu Obradors(1879-1945)の作品群では、何よりも、その『スペイン古典歌曲集（全4巻）*Canciones clásicas españolas volumen I ~ IV*』が最も有名である。（以下、この作曲者名は慣例に従い、オブラドルスとする。）その第1巻の中で彼は、『王宮の歌曲集』に収録されていた<わたしだけのラウレオーラ *La mi sola Laureola*>と<愛を抱いて、お母様 *Con amores, la mi madre*>、第3巻で同じく『王宮の歌曲集』から<3人のモーロ人の乙女たち *Tres morillas*>を取上げている。但し<*Con amores la mi madre*>は、旋律を用いるのではなく15世紀の詩人フアン・デ・アンチエータ Juan de Anchieta(1462-1523)の書いた詩に、彼独自の発想によるメロディーを付け作曲を行なっている。

原曲となったフアン・ポンセ (Juan Ponce 16c.) の<*La mi sola Laureola*>の (CMP343) と、オブラドルスのそれとを比較すると、このコラージュ作品を書き上げる工程において、原曲に触発されながらも、いかに彼が自由な発想と作曲技術を凝らしたのかがよく分かる。まずオブラドルスの作品で目を引くのは、この古来の旋律の冒頭部分 (*La mi sola ...*) をモチーフとした模倣対位法による前奏部分、そしてこれをほぼ反復する形でつけられた末尾へと向かう部分ピアノである。ルネサンス風というよりは、幾分、バロック的色彩はあるのだが、古音楽という「くくり」を意識しつつ創り上げている。ある見方からすれば、ルネサンスとバロックを混淆することで、20世紀の人々に古の時代への回帰感を強めて伝えたいと狙いつけているとも言えよう。※2

※2 こういったこと、すなわちルネサンス様式とバロック様式とを混淆する傾向は、19世紀末から20世紀にかけて活躍した作曲家が「古謡」をもとにコラージュ、或いはアルカイックな音の世界を創り出そうとするときに散見される、ひとつの傾向ともいえる。その典型ともいえるものが、神秘主義の詩人、聖フアン・デ・ラ・クルス San Juan de la Cruz(1542-1591)の詩にフレデリック・モンボウ Frederic Mompou (1893-1987) が作曲した<魂の歌 *Cantar del alma*>(1957)にも現れている。

さらに CMP343 と比較すると一目瞭然なのだが、原曲の旋律の冒頭をヒントとしながらも、オブラドルスはそこから更に自らの旋律を発展させている。原曲は ABBA のビジャンシーコ形式による楽曲となっているが、オブラドルスのものは、原曲の折り返し句になるテキストを、中間部の終結としての旋律を与えている。

オブラドルスのとった、ある意味「新古典主義的アプローチ」において、もっとも大胆と感ぜられるものは、<*Tres morillas*>かもしれない。『王宮の歌曲集』には、この曲は二つのヴァージョンが記載されている、一つは作者不詳 Anónimo の<*Tres morillas m' enamoran*> (CMP24) であり、もう一つは A. フェルナンデス A. Fernandes 作とされる同名の曲 (CMP25) である。この詩と旋律は、オブラドルスのみならず、フェデリコ・ガルシーア＝ロルカ Federico García-Lorca 1898-1936) も、そして、ホアキン・ニン＝クルメリュ (Joaquín Nin-Culmell 1908-2004) もとりあげている。<*Tres morillas...*>は、スペ

イン 20 世紀の作曲家に大きな刺激を与えた題材のうちの一つであり、また創作のインスピレーションを大いに与えた曲といえよう。

面白いことに、オブラドルスも含めてガルシーア＝ロルカもニン＝クルメリュも全て CMP24 の 3 詩節からなるテキストをもとに作曲している。CMP25 の方は、以下の譜例でも解るように、ロマンセ（主として中世の騎士物語にテーマを採った長篇の叙事詩）の性格を持つものであり、3 人の作曲家とも、これを作品にするにはあまりにも大がかりなものとなってしまうと予測してのことかもしれない。※3

※3 とはいえ、オブラドルスも、その『スペイン古典歌曲集 第4巻 Canciones clásicas españolas vol.4』において、またガルシーア＝ロルカも、その『スペイン古謡集 Canciones antiguas españolas』においても、「小さな巡礼者たち Romance de los pelegrinitos」として 11 詩節にも及ぶ作品を仕上げているので、この二人の作曲家が、歌曲において決して小品志向であったというわけではない。

さて、<Tres morillas...>において、オブラドルス作品の注目すべき点は、三詩節のそれぞれの伴奏に巧みなヴァリエーションを施しているところである。このことによって彼は、原曲の持つ時代性とスタイルを大胆に超越しようと目論んでおり、それが、歌詞内容に沿いつつも、またその感興を高揚させるために、非常に思い切った、劇的なコーラージュを施している。この部分は、ロルカ版、ニン＝クルメリュ版には見られない特徴的側面となっている。伝統的に古雅な調子を纏って開始させストーリーの展開を更に誇張するように、ある意味一変させて、コンサートにおいても華やかさに満ちたインパクトを与える 1 曲として提供してくれている。

同曲に関しては、フェデリーコ・ガルシーア＝ロルカも『スペイン古謡集』において、第 5 曲 'Las morillas de Jaén' として取上げており、ホアキン・ニン＝クルメリュも『5 つのスペインの伝承歌』の第 1 曲 'Tres morillas me enamoran en Jaén' として、両者ともピアノ伴奏を施している。

### ■アルネ・ドルムスゴールによる『スペインの初期の歌曲集』

さて、スペイン・ルネサンスの世俗歌曲にインスピレーションを受けた 20 世紀の作曲家はスペイン人ばかりでない。ノルウェーの作曲家アルネ・ドルムスゴール Arne Dorumsgaard(1921-2006) は、同時に日中韓の古詩をノルウェー語に翻訳した啓蒙詩人でもあり、音楽収集家でもあったが、彼の全 22 巻にも及ぶ作品集『忘れられた歌』は、ルネサンスからバロック期を中心とする西伊仏独英の歌曲を彼自身の手で編曲した大作となっている。その第 1 巻を飾るのが『スペインの初期の歌曲集』であり、ここにもまた『王宮の歌曲集』に原曲が記載されている歌をコーラージュした作品が含まれている。<葡萄の葉は緑 Pampano verde ><狩りへ、いざ狩りへ A la caza, sus a caza ><愛を抱いて、お母様 Con amores, la mi madre >などがそれであるが、これらが全て、ドルムスゴールによる巧みなピアノ伴奏が施され、ノルウェーの作曲家による作品でありながら、現代スペインの歌手、アーティストにとっても重要なレパートリーとなっているほどに、スペインの息吹を湛える名曲集となっているのである。このほかにもビウエラの作曲家アロンソ・ムダラ (c1510-1580) の<ダビデ王は悲しんでいた Triste estava el rey David >や、クリストー

バル・デ・モラーレス (c.1500-1553) の作品を原曲とする〈アンテケーラよりモーロ人は去りて De Antequera sale el moro 〉なども取上げられている。そのどれもがドルムスゴールの非常に巧みな手腕により、珠玉とも言えるコーラージュが施されている。それらのドルムスゴールのコーラージュ作品の中から〈葡萄の葉は緑 Pámpano verde 〉に注目してみたい。

〈葡萄の葉は緑 Pámpano verde 〉の原曲は、『王宮の歌曲集』に CMP11 として収録されている。ABBA のビジャンシーコ形式をとり、CMP 掲載上はこの形式を持つ曲の通例にならない、二カ所にリピート記号を持つ 15 小節立て 4 声部からなるもの（演奏時の実際上は、当然のことながら、倍の 30 小節から成る作品）である。CMP の注釈にも「[ 写本には ] 第 7 小節目のティプレ（ここでは上 3 声意、即ちソプラノ、アルト、テノール声部）に開始音が懸けていたので」編纂者が補足を行なった」とある。

ドルムスゴールも、上記の原曲から旋律部を取上げる場合に、いくつかの作曲上の操作を行なっている。主旋律構成のために上述した CMP 編纂者の補足は取り入れるものの、近代和声及び近現代人の調性感になじむことを考えてのことであろう、まず、原曲の第 4 小節 2 及び 3 拍目の h 音は下方変位させ、またテキストのアクセントーションにも合わせるために、当該小節の第 1 拍目を 2 倍にし、3 拍目音価を半減させている。また、編纂者が c 音に補足したムジカ・フィクタは、和声的。旋律的短音階として扱うために、ドルムスゴールもまた、短調の主音へ向かう導音として、同様に上方変位を採用している。

一般に、名曲の編曲という仕事では、原曲の持つキャッチーな（人口に膾炙した）旋律に‘あまり’手を加えることはしない代わりに、前奏、間奏、後奏などは、実に編曲者の腕の見せ所でもあると言って良い。この曲では、歌詞の内容——葡萄の葉が青々と、その房が真っ白く輝くとき [ 通りから人影も失せる、けだるい昼下がりの時刻に ] 一体、誰が奥様方を見かけることがあるだろうか？ エンシヌエコは彼女たちに取り巻かれ、良家のお嬢さん方にも囲まれている。（[ ] 内は、筆者による補足）—— という、詩とまどろみを誘うような三拍子系の名旋律が、ドルムスゴールの創作欲を掻立てたのであろう、非常に個性的で、しかも機知に富んだ音運びを生み出し、豊富な暗喩を籠めた前～間～後の三カ所に作曲家としての手腕を振るっている。かといってそれらが決して奇を衒ったものではなく、スペイン、しかもアンダルシアの風景を彷彿とさせる名調子を奏でている。その中でも突出したオリジナリティーは、間奏のピアノ声部低音部に現れる跳躍するスタッカートインパクトである。この発想はどこから現れたのであろうか？！ 凡庸な筆者には、この非凡な才能を持つ作曲家の心を推察するしかないのだが、このバス声部の音を聞くにつけ、あたかも収穫されて葡萄汁となったものが樽の中で発酵し、木樽の底から泡が生まれて気泡となり、葡萄液の中を立ち上っては、水面のあちこちで「プブッ、プブッ」と可愛らしく弾けている様子を感じさせはしないだろうか？ ここに「葡萄→葡萄酒→酩酊→恋の遊びへの誘い」という連想を生んでいったのだと筆者は考える。

## 本講座の意義

20 世紀の作曲家にインスピレーションを与えたスペイン・ルネサンスの歌に関しては、本稿で例示したものの他にも、まだまだ取上げたいものがある。限られた紙面の中でそれ

ら全てに触れることは到底不可能なので、今回はその代表的なもの、しかもその一部に対して言及するにとどめた。他にも特筆すべきものとして、例えば、筆者のスペイン歌曲の恩師でもあるピアニスト / 作曲家、フェリクス・ラビージャ Felix Lavilla(1928-2013) による作品にも、ビウエラの作曲家ミゲル・デ・フエンジャーナ (一般的にはフエンリャーナ) Miguel de Fuenllana(c.1500-1579) の作品に基づくく憐れんで下さい、御婦人よ Duelete de mi, Señora >もあり、またギタリスト / 作曲家のグラシアーノ・タラゴー Graciano Tarragó(1892-1973) にも、ビウエラ歌曲を含む、ルネサンス期の世俗歌曲をギター伴奏つき歌曲にアレンジした作品も多い。

こういった一連の曲を編曲・アレンジとみるか、一種のコラージュと見るか、またれっきとした作曲作品であるとするかは、また別の機会に論を展開する必要があるが、筆者は敢えてコラージュもしくは作曲という捉え方で記してきた。それは、今回、例としてあげたロドリゴにしても、オブラドルスにしても、はたまたドルムスゴールにしても、原曲の旋律に基づきながらも、その作品の構築性は、既に編曲の域を超えて、作曲作品としての風格と存在感を持っているが故である。

現代においては、古楽の研究、古楽器の複製、奏法の研究等々も、益々進歩を遂げている。ここで紹介した作品は、音楽大学で声楽を学び卒業・修了した若者が、コンサート歌手、或いはリサイタルも開くオペラ歌手として活躍していくに際して、古楽に特化した演奏会ならば良いのだが、そればかりでなく、近現代の作品も含むコンサートやイベントにおいて「ピアノ伴奏」で、古の音楽もステージから届けることができないだろうかと思いついたときのプログラミングの一助ともなれば嬉しい限りである。だが一方で、筆者としては、若い世代の声楽家たちにも古楽器の専門家と共に、古楽器の伴奏で、まずはその時代様式に近く歌ってみる、その原曲を無伴奏のヴォーカル・アンサンブルとしても演奏してみる、という体験もしてもらいたいと強く願うものである。諺に温故知新とあるが、近現代の曲を歌うに当たっても、そのルーツでもある、古楽との体験は、やがて自身の演奏のために大きな基礎となるに違いない。

【引用参考文献】 (楽譜)

Angles, Higinio: La Música en la Corte de los Reyes Católicos – Cancionero Musical de Palacio(Siglo XV-XVI), Tomo II y III Barcelona, Instituto Español de Musicología, 1947 y 1951

Dorumsgaard, Arne: Canzone Scordate – An Anthology of Early Songs and Arias, Book 1, Ten Early Spanish Songs (Ricital Publications Huntsville, Texas, 1987

Garcia-Lorca, Federico: Cnciones Españolas Angiguas para canto y piano, Unión Musical Española, Madrid, 1961

Nin-Culmell: Cinco Canciones Tradicionaes Españolas, Edicions Max Eschig, 1973

Obradors, F. J.: Canciones Clásicas Españolas vol. 1 y 3, Unión Musical Española, Madrid, 1921(xol.1)-1941(vol.4)

\*\*\*\*\*

## 参加学生

### 若林ゆみ（ソプラノ）

まず今回の講座にも引き続き同じメンバーで参加させていただけたこと、非常に嬉しくありがたいことでした。

スペインの音楽、特に歌に関しては学生時代に触れることがほとんどなかったため、今回選出された作品だけでもこんなに面白い楽曲があるのかと、楽譜を配布されたときから驚きとワクワクで一杯でした。水戸先生の選曲もさることながら、今回は服部先生のご用意してくださった卓越な翻訳、坂崎先生含めお三方の対話形式で進められる構成もまた本講座をより色濃いものにしていただきました。坂崎先生は授業内外で自分が大変お世話になった先生でもあり、学内でお話を聞く機会が減ると思うと寂しいですが、こうしてご退官の節目に立ち会えたことがとても幸せでした。

今回挑戦した楽曲は現代の合唱曲と比較するとテンポ設定や演奏指示も少ないため、演奏形態や形式、構成に関して奏者に決定権が委ねられる部分が多いと感じました。リハーサルのなかで「こうしたら面白くなるのではないか」という提案が歌い手からも先生方からも出て来て、『皆で音楽をつくっていく』というアンサンブル演奏の本来の姿を目の当たりにしているような気持ちになり、毎回刺激的な時間を過ごさせていただきました。

私は民族音楽研究所の公開講座に行けるときは足を運ぶようにしていますが、嬉しいことにどの講座もおもしろく勉強になるものばかりで、意義深い時間を感じられます。普段ではなかなか触れることのないモノにであう機会を、このようにすばらしいホールで、しかも無料で提供することができるのはとても希少なことだと思います。今回の講座も間違いなくその一つとして私、そしてあの場にいた方々の記憶の中に刻まれたことと思います。

人間の活躍によって私達の生活はいっそうスピードを増して、もはや危機感を感じる暇もないほどです。こうした現代社会においてこそ、ものごとの根本的な考え方が問われる古楽の存在はますます必要とされるべきであると日々痛感します。こうした文化的に重要な啓蒙活動が、これからも続くことを願ってやみません。

### 神原 愛（アルト）

昨年に引き続き、水戸先生、坂崎先生、服部先生とご一緒に公開講座で勉強させていただくこととなった。今回は中世ルネサンス時代のスペイン音楽というテーマで、人々の様々なシーンで歌われたであろう歌曲に取り組んだ。

筆者がレパートリーの中で特に印象に残ったのは「Ave Maria」と「Con que la lavare?」の2曲である。「Ave Maria」は民謡的な旋律音階や独特なリズムを持ち、実際に演奏してみると体を動かしたくなるような不思議な力を感じた。聖地巡礼の途中で夕食後に演奏し、明日への英気を養ったのかもしれない...と想像を掻き立てる曲であった。一方で、「Con que la lavare?」は生活の一場面が伺えるような悲しい詩に旋律がポリフォニー形式で付き

れており、リハーサルの際にそのドラマ的な音楽に心を動かされていた。とてとりわけアルトパートは音域が広く、中間部では高い音域から下行する印象的な旋律を有していることから、女性の悲しみに暮れる声を表現しているのではないかと考えた。

このように、どちらも楽譜を眺めるだけでは読み取れない独自の雰囲気を持っていた。実際に集って音にすることで、スペイン音楽が持つ魅力に迫ることができた。これこそまさに人類が得る音楽の原体験であり、今後も「音にする」という営みを大切にしていきたいと考える。

## 原 佑斗（テノール）

この度は貴重なご機会に参加することが出来、誠にありがとうございます。

今回はより多くの曲に挑戦し、様々な言語と触れ合う形となりましたが、やはり普段歌っておりますイタリア語などの言語に比べると難しいところは多々あり、一つの曲を完成させるのにも苦労いたしました。リズム感なども5拍子などの独特なリズムの曲もあり、曲の流れに乗るのも大変でした。しかしながら、その苦悩をもっても余りある曲の美しさや、心地よさがありました。特に、ほとんどの曲がアンサンブルであったため、調和が取れた瞬間や、お互いのリズム感がしっかり合った際の状態が、既存のアンサンブル曲に比べ、かなり充実したもののようにも感じました。

自分たちは、スペイン語などの言語に触れることは少ないかもしれませんが、これからも機会がございましたら是非携わりたいと考えております。

## 長谷川陽向（バリトン）

今回の公開講座『中世ルネサンス時代のスペイン音楽～歌とビウエラとリュートで探索してみよう！』は、その題にもあるように、スペインのルネサンス期の歌をプログラムの中心的に並べて、それを様々な編成で、曲の内容は宗教的なものから世俗的なもの（中には猥雑なものも...）までと、非常に多岐にわたるプログラムでお送りいたしました。そのおかげもあってか、当時のスペインの勢力、王宮の姿、カスティージャ語の面白さ、当時のスペイン人のものの見方や感じ方など、様々なことが音楽を通して体感できるような、刺激的で面白い講座だったと思います。

この公開講座で取り上げられたルネサンス期スペインの宗教曲には、単純明快で素朴な形式な曲が多くあり、それには個人的に強い興味を覚えました。ビジャンシーコ形式という、ビジャーノ（村人）が口ずさむような素朴でひなびた音楽をいくつか演奏しましたが、この形式の音楽で聖母マリアのテキストを歌うと、バロック以降の宗教曲にはない、聖母マリアに対する不思議な親近感を自分は覚えました。この、俗なものや聖なるものが融合するような独特な感覚から、自分は当時のスペインの神秘主義を垣間見たような気がしました。

『王宮の歌曲集』という作品集からは、宗教的なものも世俗的なものも演奏させて頂きましたが、自分は世俗的な作品で度肝を抜かれました。宮廷で歌われた曲が全てが優雅なものかと思えば、そんなことはありませんでした。酒飲み歌もあれば、猥雑な春歌まであ

り、『王宮の歌曲集』の内容の多種多様性が、当時の王宮の人々の庶民や田舎への興味や憧れを物語っているかのようでした。

今回の講座で演奏したもののひとつである「テレシーカ姉ちゃん」という邦題がつけられた曲もなかなか興味深い内容のものなのですが、『ウプサラの歌曲集』というスウェーデンで発見された謎多き曲集に収められているのも興味深いことでした。当時のスペインが広大な植民地を持っていたのは存じていましたが、北欧にまでカスティージャ文化が広まっていたのだとすれば、当時のスペインの勢いは大変に凄まじかったのだと思います。

今回の講座は珍しい沢山の曲で構成され、ルネサンス期のスペインにタイムスリップしたかのような新鮮な体験をたくさんさせて頂きました。これができるのは、ルネサンス音楽とスペイン音楽に関する非常に豊かな知識、感性、経験のある3人の先生方のおかげに他なりません。沢山のことを学ばせて頂き、改めて本当にありがとうございました。

\*\*\*\*\*

## 240330 公開講座No4 所感 中世からルネサンス時代のスペイン音楽

坂崎則子

今回の公開講座は、実際の演奏を通して中世からルネサンスにかけてのスペイン音楽を紐解いていこうというもので、司会とお話担当の坂崎の最終講義も含む形で行われました。第1部は中世の歌カンティエーガから始められました。13世紀のアルフォンソ13世編纂の聖母マリアを称える単声の2曲が歌われ、続いて14世紀の「モンセラートの朱い本」から2曲。これは巡礼がバルセロナ近郊のモンセラート(のこぎり山の意)に辿り着いた喜びを歌い上げるもので、複数の旋律が出現するようになっていきます。さらに15~16世紀に編纂された「王宮の歌曲集」から3曲、いずれも神の救い、聖母マリアを歌う曲で、このあたりの曲はかなり精緻なポリフォニーになっています。このような多声への歩みを示すべく、モンセラートの曲集からカノンが演奏されましたが、いずれも聖母マリアを称える内容です。今日残されている楽譜は教会や王宮編纂の宗教曲が多いのですが、その他にも娯楽的な歌も残されていて、第1部の終わりから楽しい言葉遊びの曲などが演奏されました。スペインでは、楽器としてはリュート以上にビウエラが用いられて、歌の伴奏のみならず、相当高度な独奏曲も豊富に残されています。その実例が第2部最初にビウエラで独奏されたディフェンシラス(変奏曲)です。引き続き、先述の「王宮の歌曲集」や16世紀の「ウプサラの歌曲集」として有名な曲集から、思わず笑ってしまいそうな歌詞をもつ楽しい曲の数々が演奏されました。全体を通してみると、娯楽的なもの、学術的にも高度な宗教曲が違和感なく共存している様子が聞き取れて、スペイン音楽の特質が明瞭に浮かび上がってきました。

坂崎の最終講義を含めさせていただいたのですが、練習の最初からずっと立ち会い、30日の講座に向けて仕上がっていく様子をつぶさに見て、講座当日には実に充実感あふれる

演奏を聴くこととなりました。私は40年以上も西洋音楽史の教壇に立っていましたが、その間にカリキュラムの改編などがあって、音楽史の授業時間が次第に切り詰められてきたのが残念でした。音楽史は話だけでは全体像は伝わらず、実際の楽曲を楽譜と共に確認しながら、各時代の様式感を理解していくのが理想です。楽曲に触れる時間が少なくなってしまうと、実感の伴わない音楽史になってしまう危険性があります。本学の民族音楽研究所では、西洋音楽の古楽も扱われているので、こうした公開講座で演奏に触れられることは大きな救いとなっていくでしょう。授業では時間的制約で聴かせることのできない楽曲の数々が、学生達の演奏で蘇ったのを聴いて、大変感慨深いものがありました。教壇を去るにあたり、こうした企画が今後も開催され続けることを切に望んでおります。

#### 出典：

- ① La Música de las CANTIGAS DE SANTA MARIA DEL REY ALFONSO EL SABIO, 1964.Facsimil del Códice j.b.2 de el ESCORIAL, Facsimil,Transcripción y Estudio Critico. Higin Angelés.Barcelona
- ② Le Livre Vermell de Monserrat(XIVe siècle).édition pour voix a cappella.DLAFONIA Anthologie Chorale du MoyenAge Volume 3.par Jacques VIRET.Edicion a Cceur Joie
- ③ La Músiaca en la Corte de Los Reyes Catalógos.Cancionero Musical de Placio(SiglosXV-XVI).Volume1,2,1951.por HIGINO ANGELES.Barcelona
- ④ Alonso Mudarra,1545.Tres libros de música en cifras para vihuela.Sevilla.Juan de León
- ⑤ Miguél de Fuenllana,1554.Libro de música de vihuela,intitulado Orphénica Lyra. Sevilla.Martines de Montesdoca
- ⑥ 8 服部、洋一、195. ルネサンスのマドリガル 1, I,III ルネサンスのマドリガルし、I (演奏解釈・楽譜校訂・歌詞対訳)。東京：東芝 EMI. p. 4- 63.

#### 使用楽器：

Vihuela de mano de Valencia ビウエラ・デ・マーノ・デ・バレンシア 紀井利臣 2021 年 製作  
Vihuela de mano de Valencia ビウエラ・デ・マーノ・デ・バレンシア 紀井利臣 2024 年 製作  
7course Renaissance Lute 7コース ルネサンス リュート 紀井利臣 2022 年 製作

\*1(本学講師 リュート)

\*2(本学客員教授 音楽学)

\*3(本学教授 声楽)